

「高知県下のダムと河口海域の漁業被害調査」での大垣さん

岩崎敬二

この追悼文集には、大垣さんの海洋生物研究者としての業績やその研究生活について寄稿される方が多いだろう。私は、それとは少し違った側面から大垣さんの生前の姿を思い出し、記しておこうと思う。大垣さんが、学部学生時代に所属されていた学生団体とそれに関連した自然保護活動のことである。

『琵琶湖生物図鑑』と大垣さん

1970年代のなかばに京都大学の学部学生時代を過ごされた大垣さんは、「京都大学琵琶湖研究会」という学生団体に所属されていた。この研究会は、琵琶湖の生物や自然とその保護に関心を持った学生の集まりで、琵琶湖の生物の研究や自然保護活動を自主的に行っていた学生団体であった。文献を調べ、レジュメをまとめて発表をする勉強会が活動の中心だったが、時には、琵琶湖に出かけて生物の採集や調査をすることもあった。さらに、当時進行中であった「琵琶湖総合開発」による自然破壊を懸念して活動していた市民団体の調査や文献調べなどに協力をすることもあった。

当時の大垣さんは、専門家と一般市民との間の知識のギャップを埋める活動が、職業科学者を目指す学生の社会貢献のあり方であることを強く自覚され、実践されていたように思う。この研究会の会員の中には、学生の立場を活かしつつ「一市民」として市民団体の活動に全面的に参加することを目指す方々がいた。一方、大垣さんは、市民団体と少し距離を置きつつ、プロの学者・研究者が囲い込んでいる専門的な知識を、一般の方々にも利用できる形で公開していく作業を担おうという立場を取っておられた。その成果が、『京大琵琶湖研究会編 琵琶湖生物図鑑 1～3巻』という生物同定用のパンフレットである。第1巻は『琵琶湖のプランクトン同定表(1976年6月2日発行)』(図1)、第2巻が『琵琶湖の貝(1977年1月14日発行)』、第3巻が『琵琶湖の水草(1977年3月21日発行)』で、大垣さんが企画し、中心となって作成されたものである。原版を「ブルーコピー(青焼き)」で印刷し、それを糊付けして製本しただけの印刷物だが、各種の形態の特徴がシンプルだが分かりやすい線で描かれており、解説も簡潔にして要領を得たものであ

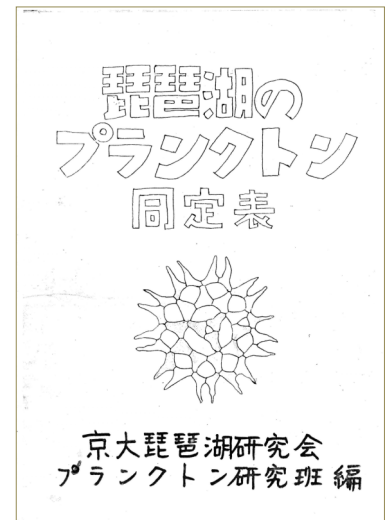


図1 京大琵琶湖研究会編(1976)『琵琶湖のプランクトン同定表』

った。そのため、市民団体に属する一般の人々を中心とした利用者には大変に好評で、特に、図1に示した『琵琶湖のプランクトン同定表(133頁)』は各所に原版が貸し出されて、合計200部以上は印刷されたと聞いている。この『琵琶湖生物図鑑1~3巻』を作成された経験は、その後、「番所崎貝類同定ガイド」(Argonauta 6号32-48頁)の作成にも大いに活かされているはずである。

この「著作」は、市販された本でも、学術雑誌に掲載された論文でもなく、大垣さんの研究業績目録に記されることはないだろう。海洋生物学者としての大垣さんを知る多くの方々もご存知のない出版物だろうと思う。しかし、公害・環境問題に対する市民運動が盛んであった1970年代に学徒となった大垣さんが、職業科学者を目指す学生の社会貢献のあり方を彼なりに示そうとした意気込みが、最も良く顕れているものであったと私は思っている。

「高知県下のダムと河口海域の漁業被害」と大垣さん

1970年代の末に大学院生となって、大垣さんは、一般市民向けの解説書の制作だけではない社会貢献の仕方を、ご自身の将来の生き方とも絡めて模索し続けておられたと思う。当時のそのような大垣さんの姿を、私は、1981年から82年にかけて行なわれた高知県下のダムに起因する河口漁業被害の調査でかいま見る事ができた。なお、この調査の成果は、「高知県下のダムと河口海域の漁業被害」というタイトルの論文として、『技術と人間』(技術と人間社)1983年5月号の87-99ページに掲載されている(この論文の全文は、Online Argonauta No.17の31-42頁に復刻・掲載されている)。

この調査は、当時、「琵琶湖環境権訴訟団」の団長であり、「河川湖沼と海を守る全国会議」の代表もしておられた辻田啓志氏から大垣さんに依頼されたものである。1981年8月、高知県香美市土佐山田町で「河川湖沼と海を守る全国会議」が開かれた。この組織は、河川湖沼の開発問題に直面して、反対運動や問題提起の活動を進めていた全国各地の市民団体が情報交換を行なうためのもので、一年に一度、大会を開いていた。この年の大会では、ダム問題に関するシンポジウムが開かれ、その席上、高知県の沿岸・河口漁業として大変に有名であったシラス漁の衰退が話題となった。高知県下のシラスの漁獲量が、沿岸の砂浜の衰退とともに各地で減少しつつあり、それは上流に建設されたダムに起因するものではないか? という問題提起であった。海岸河口部の砂浜の衰退の多くは、その川の上流にあるダムに起因するものであることは、今では常識である。しかし、当時は、まだ常識どころか定説ともなっておらず、疑いのまなざしがようやくダムに向けられ始めたところであった。

しかし、「河川湖沼と海を守る全国会議」に参加する市民団体には、このような問題を扱い、調査ができるダムの専門家も漁獲統計分析の専門家もいなかった。そこで、この会議の辻田代表は、かつて京大琵琶湖研究会に所属し、その当時は海洋生物学を専攻していた

博士課程の大学院生に調査を依頼されたのだろう。当時の大垣さんは、ご存知のように、アラレタマキビなどの海産巻貝の生態を研究されており、こういった問題の専門家ではない。しかし、大垣さんは、この依頼を引き受けて、1981年から1982年にかけて4回もの現地調査を行なわれた。ただし、一人では無理であると判断されたのか、当時修士課程1年生であった私に協力を依頼された。大垣さんの誘いを断るわけにはいかず、私は、物見遊山気分、最初の3回の調査に同行させていただいた。

調査の内容は、高知県を流れる奈半利川、安田川、伊尾木川、安芸川、物部川、鏡川、仁淀川などの河口にあって、シラス漁をもっぱらの生業としていた15もの漁業協同組合を訪れて、過去のシラス漁や地引き網漁等の漁獲統計を筆写またはコピーさせていただくことが中心であった。加えて、幾つかのダム管理事務所を訪れて、それぞれの河川を流下する土砂の量やダム湖の湖底に堆積している砂の量（堆砂量）を公開していただくこと、そして、古老の漁師さんや沿岸の砂浜の直近に住んでおられた一般の方々に、ダム建設前と建設後の沿岸、特に砂浜の状態の変化について、聞き込みをすることであった。

この調査行は、大変に苦勞した。当時、流下土砂量やダム湖の堆砂量などは公表されておらず、ダム管理事務所が、専門家でもない私達にそういったデータを公開してくれるはずもない。高知県下の沿岸各地にあった砂浜の経年変化を示すデータも写真も地図も無い。多くの漁協を回って調査の目的を説明し、過去の漁獲量のデータを提供していただくよう求めても、どこの馬の骨とも分からない大学院生に対して、各漁家の税収の算出などにも絡む貴重な漁獲統計を進んで公開していただける漁協も、決して多くはなかった。インタビュー調査でも、古老の漁師さんたちの中には、漁協の組合長の許可無しには話せないという方々もおられた。電車とバスを乗り継ぎ、河川上流のダム管理事務所を訪ね、漁村を歩き回って目的の漁協を見つけ、組合長に面会して漁獲統計の公開をお願いし、砂浜を歩き回って聞き込みを行う。こういった調査を終えた夕方、その日の宿にたどり着いて、得られたデータや聞き込みの内容を二人で整理する時、訥々とながら、「学生」という立場の軽さと「大学教員」や「専門家」という肩書きの重さを口にしていたものである。

それでも、何とか、いくつもの漁協から漁獲統計を利用させていただくことができ、古老の漁師さんや一般の方々の証言も数多く集めることができた。後者の、人の記憶に頼った主観的な情報からは、河口から数十キロ以上も上流にあるダムが、高知県東部の砂浜と河口漁業に対して深刻で様々な影響を及ぼしている姿が、確実に浮かび上がってきた。しかし、それをデータで裏付ける作業は、なかなか難航した。私は、その過程で、データの少なさに辟易して分析作業から身を退いてしまったが、大垣さんは、高知県発行の農林統計や、わずかに公開されていた一つのダム湖の堆砂量やその河口の砂浜の汀線の変動に関するデータなども入手しつつ、根気よく、地元の方々の証言を科学的に裏付けるデータと論理を紡ぎ上げていかれた。

その結果できあがったのが、「高知県下のダムと河口海域の漁業被害」という論文である。

この論文は、その後、自然科学者が書いた論文で引用されることはほとんどなかったように思う。掲載された雑誌が、科学技術の弊害や環境問題を社会学的な視点から扱った『技術と人間』であったためだろうか。あるいは、ダム問題の専門家でもなく漁業問題の研究者でもない、無名の大学院生が著者であったためだろうか。しかし、ダムによる河口漁業や沿岸環境への様々な影響を、日本で初めて明らかにした点で、画期的なものであったと私は信じている。ご自身の研究業績の評価について、常に控えめな物言いに終始されていた大垣さんにもそれなりの自負があったことは、ご自身が Online Argonauta No.17 の 30 頁に書かれた『高知県下のダムと河口海域の漁業被害』の復刻についてから強く窺われる。

この調査の最中には、研究を「生業」とする学者や大学教員が各自の研究分野の専門領域に閉じこもって、多様かつ大スケールからの視点が必要な環境問題に取り組もうとしないことに対する大垣さんの憤りを、ひしひしと感じたものである。その憤りには、そんな「学者」「大学教員」を目指して研究活動を進められていたご自身の大学院生という立場への疑念も、まわりついていたように思う。その憤りと疑念が、大垣さんのその後の生き方に大きな影響を与えたように思えてならない。

私は、在職する大学で担当している「環境論 III」という講義で、ダムによる河口漁業への被害を明らかにした日本で初めてにして代表的な研究例として、今でもこの論文を学生たちに紹介し続けている。そのたびに、データの少なさに辟易して自身の修士論文の作成を優先し、「保身」のために調査結果の分析作業を放棄した、当時の私の怠慢を悔いている。そんな私に対して、その後も、大垣さんは変わらずに接していただいた。今後、授業でこの論文を紹介する時には、そんな自責の念だけでなく、大垣さん追悼という痛切な思いも加わることになってしまった。

(いwasaki けいじ・奈良大学教養部)